

県番号 27	学校名 松原市立松原第七中学校 外2校	指定期間 19~21
--------	---------------------	------------

平成20年度教育研究開発実施計画書

1 研究開発課題

いじめや不登校の予防及び学校復帰支援を行うための小中連携した教育課程とその指導方法・評価及び学校・教職員・生徒集団のあり方についての研究開発

2 研究の概要

松原第七中学校（以下、七中）がこれまで研究開発学校として開発した、人間関係学科（略称 HRS）の学習プログラムを改善し、小・中学校9年間の発達段階に応じた新設教科「人間関係学科（中学校；略称 HRS、小学校；略称； あいあいタイム）」及び不登校生を対象とした「ほっとスペース」を設置し、いじめの未然防止や不登校の予防、不登校生の学校復帰を支援するための教育課程及びその指導方法や評価、学校・教職員・生徒集団の在り方について小・中連携して研究を行う。

また、その実践を通じてカリキュラムの有効性の検証を行い、不登校児童・生徒の小学校からの経年変化や長期欠席児童・生徒の欠席状況の変化等を分析する。

3 研究の目的と仮説等

(1) 研究仮説

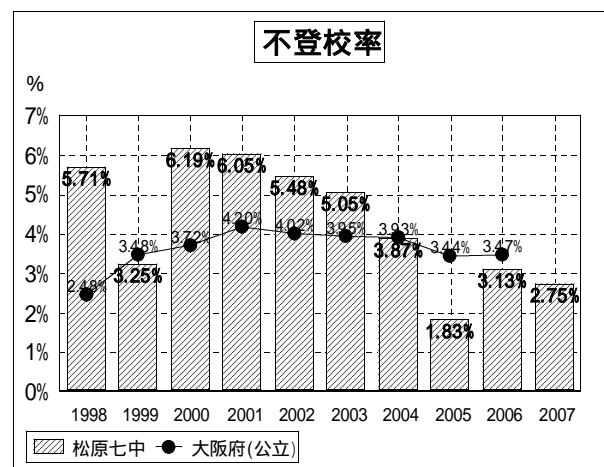
現状の分析と研究の目的

文部科学省の学校基本調査（平成19年速報）によれば、平成18年度に「不登校」を理由に、年間30日以上学校を欠席した児童・生徒数は、全国の国公私立小中学生あわせて12万6764人であり、そのうち中学生が10万2940人を占めている。この間連続して減少してきたが、5年ぶりに増加に転じ、いじめの問題も含め引き続き教育上の大変な課題である。

七中の不登校生の在籍に対する割合は、この間の「人間関係学科（HRS）」の取組や「ほっとスペース」の設置等の取組により、平成12年度6.19%もあった不登校率が、平成19年度2学期末には2.75%まで減少している。

これまでの分析結果から、小学校低学年時に10日以上欠席している児童は中学校に入って不登校に陥る可能性が高い。また、不登校は中学2年で増えるということもわかってきた。

社会の変化にともない、子ども自身のストレスをコントロールする力や人間関係をつくる力が弱くなっている。また、将来の展望や学ぶことの意義を見い出すことができにくくなっている。そして、ひとり親家庭の率がさらに高率（七中平成14年度は13% 19年度は18%）になり、また、七中で要保護や準要保護を受けている家庭は平成19



年度は28%と、経済的にもきびしい家庭が増えている。

そのような中、これまで七中校区では子どもの課題克服にむけて、幼・小・中が連携して取組を進めてきたが、七中校区の児童・生徒たちは、次のような課題を抱えている。

A. 自分自身に関わる課題

- ・自分に甘く、地道な努力をいやがる。話を聞くのが苦手、しんどいことは後回しにする、といった我慢することができない面をもっている。
- ・自分の失敗を自分に返せず、反省できないので次に活かせない。叱られ慣れておらず、叱られると全否定された気持ちになる、といった「学び体験」の不足が見られる。
- ・自分の気持ちや思いを伝えられない。外見を意識し、他人と同じことをしているとする傾向(「同調圧力」)が強く、自信のなさが見られる。
- ・「好き。嫌い。」で物事を判断し、行動する。今の自分と将来の自分のつながりが見いだせず、考え方が未熟である。
- ・責任を持った行動ができない。

B. 集団づくりに関わる課題

- ・力関係や「物」に頼った集団をつくりがちである。
- ・周りの気持ちを推しはかった行動がとれない。
- ・自分の行動が周囲にどのように影響するかという想像力がない。
- ・本音を出さず、他人を信じられない。
- ・教師との関係はつくれるが、子どもどうしの関係がつくれない。

C. 学習・運動面に関わる課題

- ・学習意欲が低い。
- ・鉄棒やマット運動が苦手である。また、同じ姿勢を持続させられない。

D. 家庭生活に関わる課題

- ・親子の会話が少ない。
- ・経済的にきびしい家庭が多い。
- ・力で押さえようとする親、力で反発する子どももいる。

この様な現状を受けて、学校は、児童・生徒一人ひとりに対して、「学校での心の居場所づくり」をめざして、様々な学びのスタイルや、特色と魅力ある学校行事等の工夫・改善を行うとともに、いじめや不登校を予防し、不登校生の学校復帰をめざす必要がある。

そのため本研究では、

松原第七中学校とともに、恵我小学校・恵我南小学校においても、ストレスマネジメントやソーシャルスキルを系統的に学ぶ「人間関係学科(中学校：略称 HRS、小学校：略称 あいあいタイム)」を設定する。

中学校区の小学校と連携して、義務教育9年間の「人間関係学科(中学校：略称 HRS、小学校：略称 あいあいタイム)」の学習プログラムを研究開発する。

松原第七中学校においては、完全学校(教室)復帰への中間ステーションとしての「ほっとスペース」を充実し、柔軟で、多面的な教育課程を編成する。そして、そこでのノウハウを小学校での取組に生かす。

また、このような、中学校区内の研究・実践にとどまらず、本市教育委員会が実施する「心の窓にアクセス事業」(情報機器を活用した在宅支援の事業)や、チャレンジルーム(松原市教育支援センター教育相談室)とも連携を図りながら、学校と地域・家庭を結び、子どもたちの育ちを支援する総合的なネットワークの構築とともに、協働した運営をめざしたい。

以上の取組を通じて、いじめのない、いじめを解決できるような人間関係の向上と居場所のある集団づくり(学校、学年、学級)をすすめ、また、不登校生の学校復帰の道筋を明らかにするとともに、児童・生徒たちのストレスマネジメント能力の育成をはかる等、生涯にわたって活用できる強靭な精神的基盤を培い、「生きる力」を育むことをめざす教育課程の研究・開発を目的とする。

「人間関係学科(HRS、あいあいタイム)」について

小学校では、遊びや様々な集団活動、そしてその中の友達との触れ合いを通して、一人ひとりの違いに気づき、違いを認め合える感性を育成していく必要がある。そのことは同時に、学級・学校が一人ひとりにとっての居場所となることであり、「いじめをしない、されない、許さない力」を育成することにつながると考えている。

また、中学校では、特に不登校を改善・予防するために「自らのストレスに気づき、ストレスを自己コントロールする力」「自己理解を通して、相手を受け入れ、自己表現しながら温かい人間関係をつくる力」を育てることは急務だと言える。これらの力は、もちろん「道徳」や「特別活動」「総合的な学習の時間」など学校教育全般の中で育成される面もあるが、さらに、児童・生徒一人ひとりの現状を分析し、年間を通して系統的に実施する必要がある。

そこで、小学校においては3～6年に新教科「人間関係学科(あいあいタイム)」を、また、中学校においては全学年に新教科「人間関係学科(HRS)」を実施し、幼稚園、小学校、中学校11年間の育ちの中で、以下に示す12のスキルの育成をめざす。

<11年間で獲得させたいターゲット・スキル>

自立・自律にかかるスキル

自己信頼

自分の性格・長所・短所・願望・嫌いなことを認識する
自分を好きになる
ポジティブ(前向き・積極的・建設的)に考える

自己管理力

自分のことを自分でできる
辛抱強く、集中して取り組む

ストレス対処

自分が変えることができない状況に対処する
困難な状況(喪失、拒絶・逃避)を扱うための対処戦略
プレッシャーの下で落ち着きを保つ

時間管理

決断と問題解決

自分で決断する
問題やその原因を見極め、何が起こったか正確に予測する
助けを求める
折り合いをつける
和解する

計画性

情報活用力

関係性をつくるためのスキル

感情対処	自分自身や他人の情動に気づく 不安や喜怒哀楽の感情をコントロールする
コミュニケーション力	効果的で適切な言語的・非言語的コミュニケーション アサーティブネス 内気を克服する 人の話をよく聞く 断る
対人関係	協力する 信頼して共同作業をする 共感する 友達をつくる
ピア・プレッシャーへの対抗	仲間のプレッシャーに負けない
境界設定	自分と他者を分ける 適切な距離感をとる 適切な対人関係のための限界を知る

上記の12のターゲット・スキルは、幼稚園・小学校・中学校11年の育ちの中で育成を目指すが、11年間の縦軸を意識しながら、その時々に必要なプログラムを子どもたちに提供し、スキルを獲得させていく。

<11年間で育てるターゲット・スキル>

	幼稚園	低学年	中学年	高学年	中学生
自己信頼					
自己管理力					
感情対処					
コミュニケーション力					
対人関係					
ストレス対処					
ピア・プレッシャーへの対抗					
時間管理					
境界設定					
決断と問題解決					
計画性					
情報活用力					

幼稚園に関しては、できるだけ多様なスキルに出会わせることをねらいとする。

；必ず獲得させたいスキル ；できれば獲得させたいスキル

11年間をかけて積み上げて育てていくスキル

自己信頼・自己管理・感情対処・コミュニケーション力・対人関係
子どもの成長に応じて育てていくスキル

ストレス対処・ピア・プレッシャーへの対抗・時間管理・境界設定・
決断と問題解決・計画性・情報活用力

上記のスキルの育成をめざす「人間関係学科(HRS・あいあいタイム)」の授業は、カウンセラーなどの専門家も授業者として招聘し、座学だけではなく、参加・体験型の学習手法を取り入れた学習を年間35時間、系統的・計画的に設定する。

このような教育課程を編成することにより、児童・生徒の自己肯定感を高め、社会的なスキルや自己をコントロールする力を養うことが期待できる。

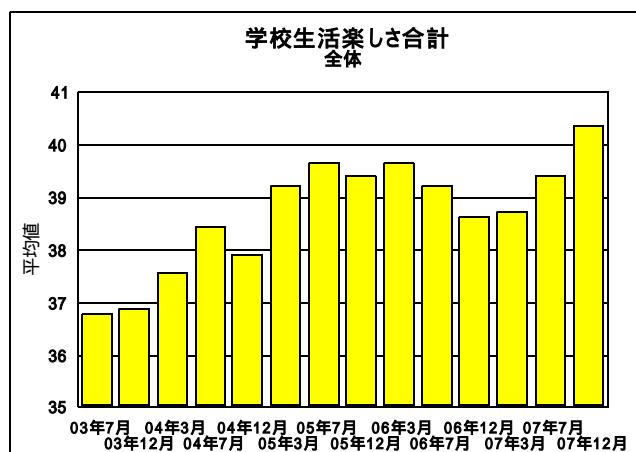
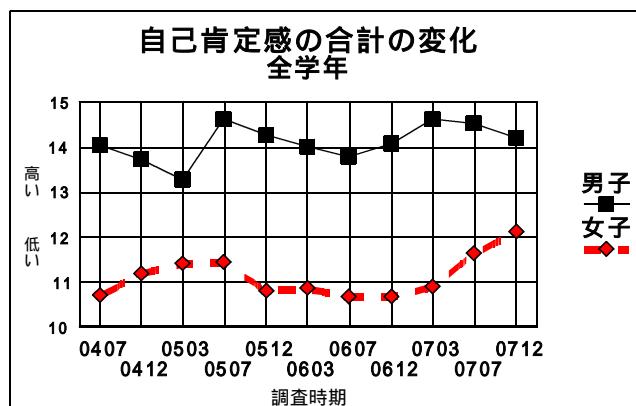
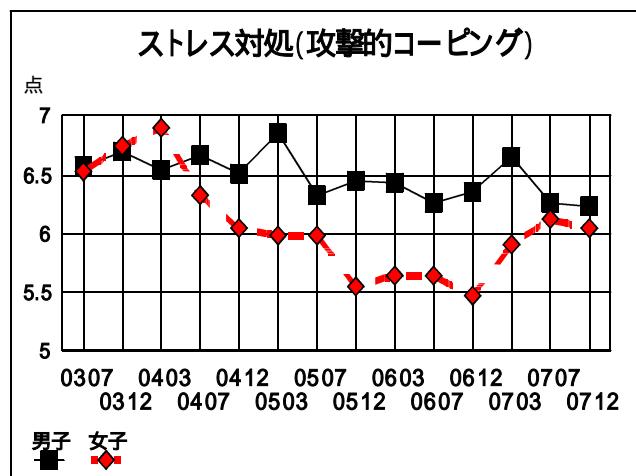
また、平成16年度から、地域と学校が協働して「地域の中で子どもをほめて育てよう」をテーマに子どもボランティア手帳(地域協主催)に取り組んでいる。これは、中学生が地域のボランティア活動に参加しやすい環境づくりを進め、地域の側から、子どもたちの社会参加へのシステムを作り、子どもたちの社会的有用感や自己肯定感を高めるための取組である。さらに研究と工夫をすすめ「人間関係学科(HRS・あいあいタイム)」と関連した取組として発展させたい。

平成15年度から17年度の七中3年間の研究開発で、「人間関係学科(HRS)」の取組を進める中で、ストレス対処法として、人を叩いたり、嫌なことを言ったり、ものにあたったりする好ましくないコーピング(攻撃的コーピング)が減少してきていることがわかった。

特に女子においてその傾向が顕著であり、子どもたちは、困ったことがあった時、何かを攻撃することでストレスに対処することから、相談して解決を図ろうとする好ましい対処方法を手に入れつつある。そして自己肯定感は年々上昇の傾向にある。

その結果、七中では右下のグラフで示すように、「学校生活が楽しい」と答える子どもたちが年々増加しており、「人間関係学科(HRS・あいあいタイム)」の取組が、子どもたちにより効果を及ぼしていることがわかつってきた。

また今年度両小学校においても「学校に来るのが楽しい」と答えた児童は80%前後と増加の傾向にあり、今後、このような中学校における成果を小学校にも広げていくことが求められる。とりわけ非攻撃的・協調的に自己主張し、問題を解決する力、自己の感情や行動をコントロールするスキルの獲得は小学生にとっても緊急の課題となっており、「学校生活が楽しい」と言える子どもたちを小学校から育てていく上で新教科「人間関係学科(HRS・あいあいタイム)」に取り組む必要性は高まっている。また、そのことにより中学校における取組もさらに高まり深まっていくことが期待できる。



中学校区の小学校と連携した、義務教育9年間の「人間関係学科(中学校：HRS、小学校：あいあいタイム)」)の学習プログラムの研究開発

七中においては、平成15年度から17年度の3年間において、ライフスキルの習得をめざす学習を通して、自分を大切にし、良好な人間関係を作り出すことを目標とする「人間関係学科(HRS)」の中学校3カ年間(年間35時間、合計105時間)の学習プログラムを作成し、そのプログラムに則って学習指導を行ってきた。

今後、これまで開発したプログラムを、小学校6年間との接続の観点や、いじめを予防・解決する力を育成する観点から改訂を図っていく必要がある。

中学校3年間の「人間関係学科(HRS)」の学習

<これらの学習プログラムは、参加・体験型を基本とする>

	気づきの1年	広がりの2年	深まりの3年
一 学 期	中学校入学！新しい自分に出会おう 自己認識・効果的コミュニケーションスキル	新学年！新しい自分に出会おう 自己認識 ----- コミュニケーション法を学ぼう 自己認識・対人関係スキル・効果的コミュニケーションスキル	中学校最後の年のはじまり！新たな自分に出会おう 自己認識・対人関係スキル・効果的コミュニケーションスキル ・問題解決スキル ----- 修学旅行直前、仲間と分かち合う大切さを学ぼう 修学旅行を終えて、仲間と力を合わせる方法を学ぼう 意志決定スキル・対人関係スキル・問題解決スキル ----- 職業調査に向けて 社会に通用するスキルを学ぼう 自己認識・意志決定スキル・効果的コミュニケーションスキル ・ストレス対処
	新しい仲間との関係をつくりよう 効果的コミュニケーションスキル・対人関係スキル・意志決定スキル・問題解決スキル	人ととのつながりを深め、物事を解決しよう ・問題解決スキル	
	自分をコントロールできる力を身につけよう 情動対処		
二 学 期	仲間と協力しよう 共感性	職場体験学習とむすんで… 社会に通用するスキル・マナーを身につけよう 意志決定スキル・効果的コミュニケーションスキル・ストレス対処・情動対処	ステップアップ・マナー 社会に通用するスキルを身につけよう 対人関係スキル・効果的コミュニケーションスキル・ストレス対処・情動対処 ----- 進路決定にむけて積極的な考え方を手に入れよう 創造的思考・意志決定スキル・批判的思考
	ストレスに気づき、ストレスをマネジメントしよう ストレス対処		
	仲間との関係を深めよう 対人関係スキル・共感性	仲間との関係、自分のあり方を見つめ直そう 共感性・対人関係スキル	

三 学 期	豊かな発想をもって、自分をコントロールしよう 情動対処・創造的思考	スキー合宿 クラスミーティング直前 ストレスに負けない方法を学ぼう 自己認識・ストレス対処・効果的コミュニケーション	卒業を前に自分の成長を自覚し、仲間との関係をふりかえろう 共感性・ストレス対処・自己認識・創造的思考
	今までの自分の成長を確認しよう 創造的思考		

「人間関係学科(HRS)」は、家庭生活や学校生活などの集団生活を行う上での必要不可欠なソーシャルスキルやストレスマネジメント能力などを体験的に学ぶ教科である。それらを学ぶ中で、集団の中でほっとできる自分の居場所をつくり、自己認識を高め、まわりと協力できる力を身につけさせていくことができ、学校生活が楽しいと答える生徒が増加している。「人間関係学科(HRS)」は教科での学習や学級・学年・学校での生活をスムーズに行える力につけるための基本的な学びであるといえる。

A：小学校と連携した自己肯定感、社会的有用感を育成する小・中9年間の学習プログラムの作成

これまでの研究の不登校生に関わる分析から、中学校で不登校状態に陥る生徒は、小学校段階からその兆候(遅刻、欠席)が見られることが多く、低年齢層から「人間関係学科」を実施することが必要であると考えられる。

このような観点に立ち、小学校における「人間関係学科(あいあいタイム)」中学校での「人間関係学科(HRS)」を連携して進めていくことを念頭において、

「人の思いを受け止め、自分の思いを表現できる子ども」

「自分を見つめ、自分で考えようとする子ども」

「人を信じ、人とつながろうとする子ども」

をキーワードに実践と研究を積み上げていくことが必要かつ有効であることが、七中校区では確認している。

具体的には、ターゲットスキルとして「自己信頼」「感情対処」「コミュニケーション力」「対人関係」「ストレス対処」を中心に据え、低学年では「友だちとなかよくなろう」、中学年では「気持ちをわかろう」、高学年では「つながりあおう」をテーマに、あいあいタイムの学習プログラム開発に取り組んでいる。

平成19年度 小学校6年間の「人間関係学科(あいあいタイム)」の学習

<これらの学習プログラムは、参加・体験型を基本とする>

	友だちと仲よくなろう！ (低学年)	気持ちをわかろう！ (中学年)	つながりあおう！ (高学年)
一 学 期	友だちのことをしろう！！！	気持ちをわかろう！	あったかい言葉かけにチャレンジ！
	いっしょにあそぼ 話し上手、聞き上手になう	心をあわせて挑戦だ！ 友だちと協力してがんばりきろう！	自分たちの班づくり みんなで協力、一つの「わ」になろう！
	友だちっていいな	自分を知ろう、友だちを知ろう	友だちのことを見つめよう

二 学 期	友だちと仲よくなろう みんなであそぼ	気持ちを伝えあおう イライラ解決大作戦	わたし発見！友だち発見！ ふれあいあい・お話あいあい・信じあいあい・冒険あいあい
	すすんで、友だちを誘って 一緒に楽しもう いいとこいっぱい見つけ た	言いたいことを伝えよう 友だちとのつながり方を見 つめよう	相手の心を受け止め、お互 にわかり合うために 自分をふり返り、伝え方を工 夫しよう
	みんなで力を合わせよう！ 聞き方名人になろう。	気持ちでつながろう ホッとな関係をつくろうよ	ストレスなんてこわくない！ つながりあい、あいわきあい あい
三 期	自分大すき、友だち大すき 自分の気持ちを相手に伝え よう	伝え合あう、つながろう 相手の気持ちも自分の気持 ちもスッキリ	お互いをわかり合うために いろんな見方、いろんな声か け

以上のような取組は、違いを認め合える学校づくり、全員が生き生きと結びつく学級集団づくり、そして、一人ひとりに確かな学力を保障する学習指導と有機的に結びついてこそはじめて効果あるものとなることができる。そして、学校・学級がすべての子どもたちにとって真に居場所となるよう全力を挙げて取り組んでいかねばならない。また、そのことがいじめ・不登校を学校として、さらには、中学校区として克服することにつながっていくと考えている。

特に、中学校への進学時に子どもたちが受ける大きなストレスを思うとき、小学校高学年から中学校へのスムーズな接続、小中の段差の解消をめざした学校システム、児童・生徒の実態にあったプログラムについて研究を深めたい。

これまで、七中校区の幼稚園、小・中学校の園長・校長・教頭・教務担当教員・生徒指導担当教員・人権教育担当教員で構成する「校区連絡会」が中心となって校区連携を推進してきた。この「校区連絡会」で「校区合同研修会」や「校区授業研究会」、「校区生徒指導連絡会」等の取組内容を検討している。

「校区授業研究会」では、校区の幼稚園・小学校・中学校の全教員が集まって研究授業を実施し、幼・小・中の連携を強めてきた。平成18年度は小学校で試験的に中学校教員と小学校教員との協働で「人間関係学科」の学習プログラムを作成し、研究授業を実施した。

また、学級担任制から教科担任制へと移行する小中の接続をスムーズにし、児童・生徒の実態を多面的に把握する意味でも、小学校高学年での、交換授業や少人数指導の実施と併せ、学年全体で児童生徒を指導する体制の構築を図りたい。

平成19年度は、このような中学校区の協同研究を深める中で、中学校の「人間関係学科(HRS)」とともに、小学校における発達段階に適応した「人間関係学科(あいあいタイム)」の学習プログラムを小学校と連携して研究開発し、小・中9年間の学習プログラムづくりに取り組んできた。

B : 七中校区での児童・生徒の実態交流と実態分析

中学校で不登校状態に陥る生徒は、小学校段階からその兆候（遅刻、欠席）が見られることが多く、児童・生徒の実態をきめ細かに把握し、不登校児童・生徒等に支援を行っていく必要がある。

そこで、「校区不登校生等支援会議」を設置し、遅刻の多い児童・生徒や欠席がちな児童・生徒等の実態交流を行い、児童・生徒の実態を分析し、不登校児童・生徒の早

期発見、早期支援を図っていきたい。

特に、小学校においては、自分に自信が持てない、自分の気持ちを正しく伝えることができない、感情を押さえきれない等、様々な課題が浮き彫りになってきており、非攻撃的・協調的に自己主張し問題を解決する力、自己の感情や行動をコントロールするスキルを育てていきたい。そして、遊びや様々な集団活動、そしてその中の友達との触れ合いを通して、一人ひとりの違いに気付き、違いを認め合える感性を育成していきたい。

以上のような小中9年間を通じた取組により、「いじめをしない、されない、許さない力」の育成を図るとともに、いじめ・不登校の予防、不登校児童・生徒の学校復帰を支援することができ、不登校児童・生徒の早期発見および早期支援を図ることが期待できる。

不登校生を対象にした「ほっとスペース」の充実と、その教育課程の研究・開発

七中においては、従来、保健室などの別室登校を通じて不登校生の学校復帰を支援してきたが、系統的な学習支援や心のケアは不十分であった。そこで、不登校生が完全学校復帰をめざす中間ステーションとして、平成15年度に学校内に「ほっとスペース」が設置された。ここでは、生徒一人ひとりの生活や心身の状況を把握し、通常の教育課程にとらわれず、弾力的な教育課程を編成し、特に以下の3点について取り組む。

A：自己肯定感の育成と多様な人間関係づくりをめざすカリキュラムづくり

前述した「人間関係学科(HRS)」を、通常より多く設定し、養護教諭やスクールカウンセラーとも連携しながら、ストレスマネジメントや人間関係づくりのプログラムの研究開発とその実践を行う。その際、地域の人々との出会いやボランティア活動への参加などを積極的に企画する。教室の中だけの、あるいは、教員とだけの狭い人間関係ではなく、生徒自身が地域に出て、多様な活動を行う中で、自己を肯定的に受け止め、人間関係においても自信が持てるようなプログラムの開発の継続をめざす。

B：学力への自信回復をめざす弾力的なカリキュラムづくり

不登校生の中には、学力への自信がなく、そのことが一つのハードルとなって学校復帰できない生徒もいる。また、「学習に対する動機付け」が極めて弱い生徒もいる。

このような生徒たちには、まず、指導教員との人間関係を作りながら「料理」や「工作」「実験」などの体験的な学習を重視し、そこから、「国語」「数学」「社会」「理科」「英語」などとの合科学習へと広げていく。例えばクッキ-づくりを通して、はかりの使い方、重さや量の概念、分数などに学習を広げていった経緯がある。

このように「ほっとスペース」では、生徒の心身の状況や、興味・関心を十分把握し、その状況に応じた教育課程を弾力的に編成し、学力の習得をめざすとともに、学力への自信を回復するカリキュラムの開発をめざす。

以上のような指導を通じて、不登校生の意欲を高め、学力への自信を回復し、学校への完全復帰できるような条件を整えたい。なお平成18年度不登校生のうち、進路未決定者は0名である。

C：開かれた総合的なカリキュラムづくり

上記A・Bのようなカリキュラムを編成するためには、学校の内外に開かれた弾力かつ総合的なカリキュラムづくりが不可欠である。そこで、様々な体験的な学習を工夫するとともに、本市事業である「心の窓にアクセス事業」を活用する。

上記A・B・Cのカリキュラムを「ほっとスペース」で行うことにより、不登校生の

自己肯定感を高め、自信を回復し、多様な人間関係を結ぶ力を育むことが期待できる。上記 の取組を、各校の「不登校生等支援会議」や「ケース会議」「こころプロジェクト」等の取組をふまえ、「七中校区不登校生等支援会議」を核として、総合的なネットワークの中で推進し、いじめの未然防止や不登校の予防、不登校児童・生徒の学校復帰を支援する道筋を明らかにしたい。

(2) 必要となる教育課程の特例

小学校3～6年で年間35時間の「人間関係学科（あいあいタイム）」の実施

（1～2年生は教育課程を変更せずに、15時間のプログラムを特活等で実施）

・開設時間は「総合的な学習の時間」より35時間を削減し、3年～6年で「人間関係学科」を年間35時間実施する。

なお、1～2年は教育課程を変更せず、特活等の時間内で15時間程度「人間関係学科」を実施する。

・「人間関係学科」では、自己認識力、共感性、コミュニケーション力、問題解決力及び、ストレスを認識しコントロールする過程を学ぶストレスマネジメント等について、6年間のカリキュラムを系統的に編成し、計画的に実施する。

中学校全学年で年間35時間の「人間関係学科（HRS）」の実施

・開設時間は「総合的な学習の時間」より35時間を削減し、全学年「人間関係学科（HRS）」を年間35時間実施する。

・「人間関係学科（HRS）」では、自己認識力、共感性、コミュニケーション力、問題解決力及び、ストレスを認識しコントロールする過程を学ぶストレスマネジメント等について、3年間のカリキュラムを系統的に編成し、計画的に実施する。

中学校「ほっとスペース」における弾力的な教育課程の編成

・不登校生が完全学校復帰をめざす中間ステーションとしての「ほっとスペース」では、音楽や美術等情操教育の時間を多めにとり、対象生徒の興味・関心に応じて教科の時間を弾力的に編成し、学ぶ意欲を高め、学力への自信がもてるようにする。

・原則的には、国語・社会・数学・理科・英語・「総合的な学習」の時間から、合計240～260時間を削除し、「人間関係学科」を190時間、音楽・美術を各70時間実施する。このように、教科等の指導と並行して、スクールカウンセラーや養護教諭とも連携しながらストレスマネジメントや人間関係づくりのプログラムを通して、学校復帰をめざし、「人間関係学科」も通常（年間35時間）より多く設定する。その際、地域の人々との出会いや、ボランティアなど地域活動への参加も考慮する。

・不登校生が完全学校復帰をめざす、中間ステーションとしての「ほっとスペース」では、一人ひとりの生活や心身の状況を把握し、入級時期等も考慮し、対象生徒一人ひとりに応じた形で、弾力的な教育課程を編成する。

(3) 研究成果の評価方法

児童・生徒各個人の変容については、学習過程における児童・生徒の気づきや意見、ふりかえりを大切にし、その資料や作文、作品等をファイルし、ポートフォリオ評価を大切にする。その中で、児童・生徒自身の自己評価や友だちからの評価、保護者からの評価、教員からの評価をとりまとめ、地域の方や運営指導委員会等専門家からの評価など、多種・多面的な評価を行い、児童・生徒の学習意欲の向上に結びつけたい。

また、研究成果の測定方法については、不登校児童・生徒数の経年変化を考察するとともに、「学校生活アンケート・調査」を毎学期末に実施し、子どもたちのストレスや自己

肯定感など人間関係づくりにかかる指標を数値化し、9年間の「人間関係学科(HRS、あいあいタイム)」の効果測定を行う。

それ以外に、次の4点にわたって考察・評価したい。

9年間の「人間関係学科(HRS、あいあいタイム)」については、児童・生徒の作文・作品などを分析するとともに、児童・生徒や担当教員、保護者からのアンケート調査や面談などをもとに、取組の成果と課題を分析・評価する。

中学校の「ほっとスペース」については、どのように効果があったのか、生徒本人、保護者への面談やアンケートなどを通して考察する。

情報機器等の活用による学習支援についても、どのように効果があったのか、また、「出席」についても客観的なデータに基づいて示し、欠席がどんなときに継続し、出席できるのはどんなときかを具体的に示していきたい。

上記3点を通して、学校を核とした子どもたちの育ちを支援する、地域・家庭の総合的なネットワークがどのように構築され、どのように効果があるのか考察したい。

以上のことの大切にして、各校での授業研究会や七中校区全体の公開授業・研究会などを行い、研究成果を報告書にまとめるなど、取組について積極的に情報発信し、保護者・地域の方々をはじめ、教育委員会や研究者など専門家の評価・指導もいただきたい。

4 研究計画等

(1) 前年までの研究開発の概要

研究仮説及び研究計画に基づき「中学校では、“人間関係学科(HRS)”、小学校では、“あいあいタイム”的創設」と、「不登校生を対象とした“ほっとスペース”的設置とその教育課程の研究・開発」に向けて、以下の研究を行ってきた。

児童・生徒の実態を分析し、子ども像を明らかにする。

毎学期ごとに校区の全児童・生徒を対象とした「生活アンケート」を実施すると共に各校の不登校生等支援会議・校区不登校生等支援会議を開催し、不登校生等の状況とその対応について交流した。

その結果、ストレスを抱えている児童・生徒は、小・中学生とも高い数値を示しており、そのストレスに対する対処についても「人の嫌がることをいう」「人を叩く」「我慢する」など好ましくない対処をしている子どもが多く見られた。

三校合同の組織的運営

七中校区として研究を推進するため、校区研究開発企画委員会(各校の管理職・研究主任・職員代表、市教委)を設置し、各校の取り組みの交流や計画の推進調整を図ってきた。また、各校研究主任と職員代表で「七中校区あいあいプロジェクト」を組織して、具体的なカリキュラムの検討、生活アンケートの内容検討・集計・分析などを実施した。

三校教職員の意思統一を図る合同研修の実施

新教科(中学校一人間関係学科(HRS)、小学校ーあいあいタイム)の授業を通した合同の授業研究会(6月、11月)、教職員の意思統一とスキル向上をめざした合同研修会(夏期休業中)を実施した。

これらの研修会を通じて、三校の児童・生徒理解を深めるとともに、新教科「人間関係学科」のカリキュラムづくりを進めた。

「人間関係学科（HRS） あいあいタイム」のカリキュラムづくりと実施

中学校の「人間関係学科（HRS）」は、前回の研究で開発されたカリキュラムを基にしながら現在の児童・生徒の実態に添って改訂が進められた。小学校の「あいあいタイム」は、研究計画で示した各学年のテーマを基に児童の実態を考慮しながらカリキュラム作りが進められた。また、三校とも全学年が校内授業研究会を行い、専門家の指導も受けながら取り組まれた。

「ほっとスペース」の設置とその運営

「ほっとスペース」へは、10月には、2年生でひきこもり傾向の生徒1名が入室することができた。1年次はわずか10日間の出席で、以降完全不登校であったことを考えれば大きな成果である。その状況を簡単に記述すると、以下の通りである。

《中2女子》

入学当初より学校を休みがちになる。母とのメール交換もあったが、2年生になり家庭訪問では「パソコンばかりしている。困っている。」とのこと。新しい担当教員が母とのメールのやりとりを再開することになる。その教員が校外学習でのお土産を届けると、本人よりお礼のメールが入り、これ以降本人とのメールのやりとりが始まった。その中で勉強への不安が大きくなり、夏休みにファックスでの学習会を提案。本人もやる気を出しあいの問題・解答の送信が続くようになった。9月末には父親の強い指導や関わりがあり、母とも相談の上ほっとスペースの話をし、10月からは週に1日1時間程度、誰にも目に触れないように母とともに来室し、少しだけ学習をして帰るようになる。その頃は、本人の表情や態度に緊張とともにまだまだ険しいものがあったが、少しずつ心を開くようになり、週に2日2時間程度、2年生の他の教員とも学習できるようになってきた。今は、ほっとスペース内では笑顔も見られ、大きな声で話もでき、母や教職員とも和やかに接している。また、学習意欲も強く持つようになり、高校進学への夢も大きくなってきた。本人は3学期以降、週3日の登校を希望しており、より多くの人の関わりの中で取組を推進していく。

地域、保護者、関係機関と協働した指導とネットワークづくり

前年度当初に、「学校通信」「学年通信」等を通じて、「人間関係学科」の意義を保護者に伝えると共に、地域教育協議会総会に於いても、「人間関係学科」の意義と七中校区の三校一園の教員によるロールプレーを行い地域の方々に周知した。また、11月には七中を会場に幼・小・中の子どもたちが集い、校区の全教職員が参加すると共に、全保護者にも公開して合同授業研究会を実施した。

また、各校においては、授業参観や入学説明会で、人間関係学科の授業や職員でロールプレーをするなど、様々な場面で人間関係学科を周知した。

（2）当該年度教育課程の内容等（教育課程表については別紙1を参照）

小学校新教科「人間関係学科（あいあいタイム）」の設置（3年～6年、年間35時間）

小学校では、「友だちと協力できる力」や「自分の気持ちを素直に話す力」「友だちの気持ちに共感的にわかるとする力」「お互いの良さを認め合い、気持ちを伝え合う力」の育成を目標とする「人間関係学科（あいあいタイム）」を設置し、年間を通じて系統的に実施する。（なお、1・2年は教育課程の変更を行わず、年間15時間程度、特活や生活科等の時間の中で、教育内容と関連づけて取り組む。）

この「人間関係学科（あいあいタイム）」において、次のような能力を育てる

- ・「自分を知ろう！友だちを知ろう！」（自己信頼）
- ・「友だちをふやそう！」（対人関係）

- ・「『だめよ！』と言えるのが友だち」(対人関係)
- ・「こんなときどうする！」(決断と問題解決)
- ・「ストレス解消法 一つ覚えた！」(ストレス対処)
- ・「みんなでいっしょ！たのしいね！」(自己信頼)
- ・「うれしい言葉やいやな言葉」(コミュニケーション力)

これらのプログラムはゲームやロールプレイを基本とする。

中学校新教科「人間関係学科(HRS)」の設置（全学年年間35時間）

「自らのストレスに気づき、ストレスを自己コントロールする力」「自己理解を通して、相手を受け入れ、自己表現しながら温かい人間関係をつくる力」を目標とする「人間関係学科(HRS)」を設置し、年間を通じて系統的に実施する。

この「人間関係学科(HRS)」において、次のような能力を育てる。

- ・「かけがえのない自分に気づく」(自己信頼)
- ・「互いの共通性とちがいについて理解し、ちがいを尊重する」(自己信頼)
- ・「友だちや家族との関係を大切にする」(対人関係)
- ・「基本的な言語的・非言語的コミュニケーション力を身につける」(コミュニケーション力)
- ・「意志決定の基本的プロセスを学ぶ」(決断と問題解決)
- ・「問題解決の基本的プロセスを学ぶ」(決断と問題解決)
- ・「ストレスを認識しコントロールする過程を学ぶ」(ストレス対処)

これらの学習プログラムは、参加・体験型を基本とする。

中学校「ほっとスペース」における弾力的な教育課程の編成

不登校生が完全学校復帰をめざす中間ステーションとして、引き続き学校内に「ほっとスペース」を設置する。ここでは、生徒一人ひとりの生活や心身の状況を把握し、それに応じた形で、弾力的な教育課程を編成し、生活習慣の立て直しや学習指導を行い、学ぶ意欲を高めるとともに、学力への自信が持てるように指導する。生徒一人ひとりの状況によって教育課程は異なるが、国語・社会・数学・理科・英語の5教科における実施時数の最小値は、教育課程表(別紙1-1)とする。また、指導教員との人間関係をつくりながら、「料理」や「工作」「実験」などの体験的な学習を重視し、そこから国語・社会・数学・理科・英語などとの合科学習へと広げ、学習指導要領の教科の目標が達成するように指導していく。これまで、クッキーづくりを通して、ハカリの使い方や重さや量の概念、分数などに学習を広げ、内容を深めていった経緯がある。そのように、人間関係をつくり、自信を回復させ、学習意欲を高めて、さらに、子どもの変化を見ながら、5教科の学習にシフトした指導を順次行っていき、学習指導要領の目標達成についても図っていきたい。

スクールカウンセラーや養護教諭と連携し、「ストレスマネジメント」及び「人間関係づくり」の学習プログラムを実施し、自らのストレスに気づくとともに、ストレスをコントロールする力、豊かな人間関係をつくる力などを育むことをめざす。

また、心因性のひきこもり傾向を持つ不登校生については、パソコン等ネットワークを活用した在宅の学習支援にも積極的に取り組む。さらに、関係諸機関や地域の方々の協力を得て、そのネットワークの中で、ボランティアなど様々な交流・体験活動を展開し、「実体験」として、「人の温かさ」や「かけがえのない存在としての自分」等を実感できる学習プログラムを開発できるよう工夫したい。

(3)全課程の修了認定の要件

(4) 年次研究計画

第一年次	<ul style="list-style-type: none"> ・児童・生徒の実態を分析し、育成する子ども像を明らかにするとともに、先進的な研究と実践についての調査・研究（仮称 3校合同プロジェクトチームの発足） ・教職員のカウンセリングマインドとスキルの向上をめざした校内研修会・校区合同研修会の実施 ・9年間の「人間関係学科(HRS、あいあいタイム）」の学習プログラムづくり ・中学校「ほっとスペース」のカリキュラム整備と、人的・物的両面の環境整備 ・カリキュラムの実施と結果の分析（2・3学期） ・2年次のカリキュラム等の検討及び年間指導案の作成 ・不登校児童・生徒への「心の窓にアクセス事業」活用の在り方 ＜人間関係づくりや学習支援プログラムの研究開発＞ ・地域、保護者、関係諸機関と協働した指導とそのネットワークづくり
第二年次	<p>カリキュラムの本格実施とデータの蓄積</p> <ul style="list-style-type: none"> ・教職員のカウンセリングマインドとスキルの向上をめざした校内研修会、校区合同研修会の推進 ・9年間の「人間関係学科(HRS、あいあいタイム）」の学習プログラムづくり及び指導方法の確立と評価規準の作成 ・ひきこもり傾向の不登校児童・生徒への「心の窓にアクセス事業」活用の強化 ＜学習支援プログラムの確立や担当教員の育成＞ ・中学校「ほっとスペース」の指導方法の充実 ・地域、保護者、関係諸機関と協働した指導とネットワークの推進 ・中間まとめの研究発表を通して、研究の有効性の検証と最終年度の課題の明確化 ・最終年度の学習プログラム等の検討
第三年次	<p>調査・研究の実施と成果のまとめ、及び、報告</p> <ul style="list-style-type: none"> ・9年間の「人間関係学科(HRS、あいあいタイム）」のカリキュラム・指導方法・評価規準のまとめ ・中学校「ほっとスペース」のカリキュラムや指導方法等のまとめ ・情報機器を活用した総合的な支援プログラムの確立と担当者の役割の確立 ・地域、保護者、関係諸機関と連携した指導の実践とまとめ 特に「ボランティア手帳」について ・最終年度の研究発表会を通して新しく設定した教科等の可能性と課題について報告 成果と課題は報告集等にまとめて収録

第二年次の課題

七中校区として11年間のカリキュラムづくりを行う。中学校では、小学校との接続の観点、いじめの予防や解決する力を育成する観点から、改訂を図っていく。小学校では、今年度作成したプログラムを整理し、カリキュラム化していく。

校区の1・2のターゲットスキルをもとに、市民教育・ジェネリック教育・PSE教育などを参考に、校区として「人間関係学科」の実践を進めていく上で共通の基盤となる「人間関係学科指導指針」の作成を目指す。

七中校区としての効果測定を今後も継続的に行う。小学校は、今年度実施したアンケート項目に加え、児童の自己肯定感を把握するためのアンケートを検討する必要がある。

七中校区としての不登校生等への支援を行う。学校と関係諸機関との連携をさらに強めていく。

心理学・社会学の立場からの研究者とのネットワークづくりを行い、研究体制を強化する。

授業者の児童・生徒への関わり方や視点をさらに学び、ファシリテータとしての資質向上をはかる。

子どもの活動場所を広げ、子ども同士の小小連携・小中連携、教職員間の連携、保護者・地域との連携を深め、地域としての人間関係づくりを目指す。

保護者・地域への発信をさらに積極的に行う。

以上を推進する研究組織の充実と改編を行う。

(5) 年次評価計画

第一年次	一年次に、調査・研究し、開発・整備したカリキュラムと学習環境などについて、校内で、検討・評価するとともに、運営指導委員会等研究者・関係諸機関などの評価を受ける機会を設ける。 また、取組前後の児童・生徒や関係保護者の意見をアンケート等で集約し、次年度の実践にいかす。
第二年次	引き続き、児童・生徒や関係保護者の意見をアンケート等で集約し、取組の改善にいかす。 また、二学期に中間まとめの研究発表を行い、研究者、専門家、保護者、地域からの評価をいただき、研究開発の有効性を検証するとともに、最終年度への課題を明確にする。
第三年次	二学期に最終の研究発表を行い、新教科「人間関係学科（HRS、あいあいタイム）」と「ほっとスペース」の取組を中心に、「いじめ・不登校を予防する、あるいは、不登校生の学校復帰を支援する教育課程と指導方法・評価、及び、学校・教職員・生徒集団のあり方について、小・中学校の連携した研究開発」について、地域、保護者、研究者、関係諸機関など多方面から評価をいただき、新教科等の可能性と課題について整理し報告する。

5 研究組織

(1) 研究組織の概要

各学校園においては、管理職・生徒指導担当・養護教諭・スクールカウンセラー・

研究主任・学年代表教員・松原市教育アドバイザーによる「不登校生等支援会議（週1回）」を設置し、校内研究推進の中核組織とする。また、全職員で人間関係学科の推進、不登校児童・生徒への支援について検討する「こころプロジェクト（月1回）」を設置し、取組を実施していく。さらに「ケース会議」を隨時設定し、配慮を要する児童・生徒への具体的な支援を検討する。

中学校区においては、定期的に学校関係者による連絡会〔校区連絡会、校区校園長会、校区教頭会、校区生指連絡会、校区同担会議〕を実施し、連絡調整を図る。また、校区での研修会〔校区人研、校区合同研修会〕も定期的に実施し、校区幼・小・中の教員の共通理解を図る。そして、11年間の「人間関係づくりプログラム」の作成をめざすプロジェクト『あいあいプロジェクト』を立ち上げ、プログラムづくりを行う。研究開発学校推進を図るために「校区研究開発企画委員会」を核組織とする。さらに、子どもたちの社会体験の場の提供として、七中校区地域教育協議会と密接に連携を図っていく。

(2)研究担当者

職名	氏名	担当学年・担当教科
教諭	深美 隆司	松原第七中学校 英語科
教諭	道屋 美恵子	恵我小学校 5年
教諭	谷岡 光子	恵我南小学校

(3)運営指導委員会

組織

氏名	所属	職名	備考
西井 克泰	武庫川女子大学	教授	
佐谷 力	大阪府教育センター	教育相談室長	
古川 知子	大阪府教育委員会	主任指導主事	いじめ担当
上中 和則	大阪府教育委員会	指導主事	研究開発学校担当
門原 百一郎	大阪府教育委員会	指導主事	不登校担当
前田 正人	松原市地域教育協議会	会長	松原第七中学校区 地域教育協議会会長

池田 真季	松原市教育支援センター	相談員	松原市教育支援センター チャレンジルーム
土師 佳子	松原市立恵我幼稚園	園長	
糸井川 孝之	松原市教育委員会	学校教育部 次長兼教育推進課長	
石田 勝也	松原市教育委員会	学校教育部 参事	
山本 博	松原市教育委員会	指導主事	
稻垣 久代	松原市教育委員会	指導主事	

活動計画

- ・研究開発学校の研究計画作成、実施及びその評価について、指導助言を行う。
- ・研究開発学校から、定期的に報告を受け、研究の実際の進め方について指導助言を行う。
- ・研究開発学校における授業研究や「ほっとスペース」での学習のあり方について指導助言を行う。
- ・地域における協力者の紹介や協力依頼、他機関との連携について協力指導する。

別紙 1 - 1

松原市立松原第七中学校 教育課程表（平成20年度）

全学年で新設教科「人間関係学科」を実施

	各教科の授業時数										道徳	特別活動	選択教科	総学習的な時間	人間関係学科	総授業時数
	国語	社会	数学	理科	音楽	美術	保健体育	技術家庭	英語							
第1学年	140	105	105	105	45	45	90	70	105	35	35	0	65 -35	35	980	
第2学年	105	105	105	105	35	35	90	70	105	35	35	70	50 -35	35	980	
第3学年	105	85	105	80	35	35	90	35	105	35	35	140	60 -35	35	980	
計	350	295	315	290	115	115	90	175	315	105	105	210	175 -105	105	2940	

「ほっとスペース」の教育課程

	各教科の授業時数										道徳	特別活動	選択教科	総学習的な時間	人間関係学科	総授業時数
	国語	社会	数学	理科	音楽	美術	保健体育	技術家庭	英語							
第1学年	105 -35	70 -35	70 -35	70 -35	70 +25	70 +25	90	70	70 -35	35	35	0	35 -65	190	980	
第2学年	105 -35	70 -35	70 -35	70 -35	70 +35	70 +35	90	70	70 -35	35	35	0 -70	35 -50	190	980	
第3学年	105 -15	70 -35	70 -35	70 -10	70 +35	70 +35	90	70 +35	70 -35	35	35	0 -140	35 -60	190	980	
計	315 -35	210 -85	210 -105	210 -80	210 +95	210 +95	270	210 +35	210 -105	105	105	0 -210	105 -175	570	2940	

別紙1-2
松原市立恵我小学校 教育課程表(平成20年度)

	各教科の授業時数										道徳	特別活動	総学習的な時間	人間関係学科	総授業時数
	国語	社会	算数	理科	生活	音楽	図画工作	家庭	体育						
第1学年	272		114		102	68	68		90	34	34				782
第2学年	280		155		105	70	70		90	35	35				840
第3学年	235	70	150	70		60	60		90	35	35	70 -35	35		910
第4学年	235	85	150	90		60	60		90	35	35	70 -35	35		945
第5学年	180	90	150	95		50	50	60	90	35	35	75 -35	35		945
第6学年	175	100	150	95		50	50	55	90	35	35	75 -35	35		945
計	1377	345	869	350	207	358	358	115	540	209	209	290 -140	140		4548

別紙 1 - 3

松原市立恵我南小学校 教育課程表（平成20年度）

	各教科の授業時数									道徳	特別活動	総学習的な時間	人間関係学科	総授業時数
	国語	社会	算数	理科	生活	音楽	図画工作	家庭	体育					
第1学年	272		114		102	68	68		90	34	34			782
第2学年	280		155		105	70	70		90	35	35			840
第3学年	235	70	150	70		60	60		90	35	35	70 -35	35	910
第4学年	235	85	150	90		60	60		90	35	35	70 -35	35	945
第5学年	180	90	150	95		50	50	60	90	35	35	75 -35	35	945
第6学年	175	100	150	95		50	50	55	90	35	35	75 -35	35	945
計	1377	345	869	350	207	358	358	115	540	209	209	290 -140	140	4548

学校等の概要

1 学校名、校長名

マツハラシリツマツハラタケナチユウガッコウ タナカヨシフミ
松原市立松原第七中学校 校長 田中義文

2 所在地、電話番号、FAX番号 所在地 大阪府松原市一津屋2丁目1番9号
TEL 072-339-2507 FAX 072-339-2517

3 学年・課程・学科別幼児・児童・生徒数、学級数

第1学年		第2学年		第3学年		計	
生徒数	学級数	生徒数	学級数	生徒数	学級数	生徒数	学級数
97	3	65	2	93	3	255	9

(養護学級1学級を含む)

4 教職員数

校長	教頭	教諭	養護教諭	非常勤講師	実習助手	A L T	スクールカウンセラー	事務職員	司書	計
1	1	18	1					1		22

学校等の概要

1 学校名、校長名

マツハラシリツエカショウカッコウ
松原市立恵我小学校 校長 井上雅彦
イノウエマサヒコ

2 所在地、電話番号、FAX番号

所在地 大阪府松原市大堀3丁目4番17号
TEL 072-332-1212 FAX 072-332-0440

3 学年・課程・学科別幼児・児童・生徒数、学級数

第1学年		第2学年		第3学年		第4学年		第5学年		第6学年		計	
児童数	学級数	児童数	学級数										
109	3	103	3	114	3	87	3	101	3	100	3	614	21

(養護学級2学級を含む)

4 教職員数

校長	教頭	教諭	養護教諭	非常勤講師	実習助手	A L T	スクールカウンセラー	事務職員	司書	計
1	1	22	1					1		26

学校等の概要

1 学校名、校長名

マツハラシリツエガミナミショウガッコウ
松原市立恵我南小学校 校長 山本 清
ヤマモト キヨシ

2 所在地、電話番号、FAX番号

所在地 大阪府松原市一津屋1丁目10番9号
TEL 072-336-6900 FAX 072-336-6901

3 学年・課程・学科別幼児・児童・生徒数、学級数

第1学年		第2学年		第3学年		第4学年		第5学年		第6学年		計	
児童数	学級数	児童数	学級数										
41	2	42	2	39	1	39	2	51	2	31	1	243	12

(養護学級2学級を含む)

4 教職員数

校長	教頭	教諭	養護教諭	非常勤講師	実習助手	A L T	スクールカウンセラー	事務職員	司書	計
1	1	14	1					1		18

県番号 27	学校名 松原市立松原第七中学校 外2校
--------	---------------------

所要経費について

経費項目	金額	積算基礎	
諸 謝 金	630千円	1 運営指導委員会出席謝金 2 外部講師謝金	4人×3回×10,000円 = 120,000円 6人×2回×30,000円 = 360,000円 (研修会講師) 5人×3回×10,000円 = 150,000円
委員等旅費	584千円	1 運営指導委員旅費 2 連絡協議会出席旅費(東京) 3 調査研究旅費	4人×3回×2,000円 = 24,000円 4人×2回×40,000円 = 320,000円 6人×1回×40,000円 = 240,000円
教職員研修費	2683千円	1 研究報告書印刷費 2 研究発表会用研究紀要印刷費 3 研究発表会用リーフレット印刷費 4 一次案内印刷費 5 二次案内印刷費 6 封筒印刷費 角2 2色 長3 7 案内・資料送付代 8 研究資料購入費 9 消耗品代	500円×1,000冊 = 500,000円 300円×1,500冊 = 450,000円 250円×2,000枚 = 500,000円 40円×2,000枚 = 80,000円 60円×2,000枚 = 120,000円 35円×2,500部 = 67,500円 20円×2,000部 = 40,000円 80円×150ヶ所 = 12,000円 120円×150ヶ所 = 18,000円 120円×50ヶ所×2回 = 12,000円 2,000円×50冊 = 100,000円 情報記録媒体 160,400円 MO(5枚組)2,000円×30箱 = 60,000円 CD(10枚組)700円×72箱 = 50,400円 USBフラッシュメモリー 2,500円×20個 = 50,000円 プリンタートナー・インク268,000円 プリンタートナーカートリッジ 38,000円×4個 = 152,000円 プリンターアイントカートリッジ 3,200円×20個 = 64,000円 2,600円×20個 = 52,000円 用紙・光沢紙等 139,100円

		<p>B4[°] リンタ用紙(スーパー・ファイン100枚) $1,155\text{円} \times 30\text{包} = 34,650\text{円}$</p> <p>B5[°] リンタ用紙(スーパー・ファイン100枚) $577\text{円} \times 30\text{包} = 17,310\text{円}$</p> <p>A4[°] リンタ用紙(スーパー・ファイン100枚) $630\text{円} \times 30\text{包} = 18,900\text{円}$</p> <p>B4[°] リンタ用紙(デジタル写真用20枚) $2,467\text{円} \times 10\text{包} = 24,670\text{円}$</p> <p>B5[°] リンタ用紙(デジタル写真用20枚) $1,365\text{円} \times 20\text{包} = 27,300\text{円}$</p> <p>A4[°] リンタ用紙(デジタル写真用20枚) $1,627\text{円} \times 10\text{包} = 16,270\text{円}$</p> <p>人間関係学科用消耗品 190,806円 マジックインク $76\text{円} \times 100\text{本} = 7,600\text{円}$</p> <p>ネームプレート $280\text{円} \times 100\text{枚} = 28,000\text{円}$</p> <p>バインダー $266\text{円} \times 100\text{枚} = 26,600\text{円}$</p> <p>ポートフォリオ用クリアファイル (10枚パック) $945\text{円} \times 100\text{包} = 94,500\text{円}$</p> <p>画用紙(4切り) $2,500\text{円} \times 2\text{包} = 5,000\text{円}$</p> <p>模造紙(50mm方眼2枚組) $231\text{円} \times 30\text{包} = 6,930\text{円}$</p> <p>マグネットシート $420\text{円} \times 30\text{枚} = 12,600\text{円}$</p> <p>セロテープ $1,596\text{円} \times 6\text{ダース} = 9,576\text{円}$</p> <p>ほっとスペース用消耗品 24,549円 マジックインク $76\text{円} \times 50\text{本} = 3,800\text{円}$</p> <p>ポートフォリオ用クリアファイル (10枚パック) $945\text{円} \times 5\text{包} = 4,725\text{円}$</p> <p>画用紙 $2,500\text{円} \times 1\text{包} = 2,500\text{円}$</p> <p>模造紙 $231\text{円} \times 8\text{包} = 1,848\text{円}$</p> <p>マグネット $420\text{円} \times 24\text{枚} = 10,080\text{円}$</p> <p>セロテープ $1,596\text{円} \times 1\text{ダース} = 1,596\text{円}$</p>
合 計	3897千円	

県番号 27	学校名 松原市立松原第七中学校 外2校
--------	---------------------

担当者名簿

1. 都道府県教育委員会 / 都道府県私立学校主管課 / 国立大学法人附属学校主管課

名 称	大阪府教育委員会
住 所	〒540-8571 大阪市中央区大手前2丁目
連絡先	代表 06-6941-0351 (内線 5485) 直通 06-6944-3817 FAX 06-6944-3826 E-mail : UenakaKa@mbox.pref.osaka.lg.jp
担 当 者	大阪府教育委員会事務局 市町村教育室 小中学校課教務グループ 指導主事 上中 和則

2. 研究開発希望学校 研究開発希望学校が複数ある場合は枝番で記入

(2-1) 松原市立松原第七中学校

名 称	松原市立松原第七中学校
住 所	〒580-0003 松原市一津屋2丁目1番9号
連絡先	TEL 072-339-2507 FAX 072-339-2517 E-mail matsu7@matsubara.e-kokoro.ed.jp ホームページURL http://www.e-kokoro.ed.jp./matsubara/matsu7
校 長 名	田中 義文
研究主任名	深美 隆司

(2 - 2)松原市立恵我小学校

名 称	松原市立恵我小学校
住 所	〒580-0006 松原市大堀3丁目4番17号
連 絡 先	TEL 072-332-1212 FAX 072-332-0440 E-mail ega@matsubara.e-kokoro.ed.jp ホームページURL http://www.e-kokoro.ed.jp/matsubara/ega/
校 長 名	井 上 雅 彦
研究主任名	道 屋 美 恵 子

(2 - 3)松原市立恵我南学校

名 称	松原市立恵我南学校
住 所	〒580-0003 松原市一津屋1丁目10番9号
連 絡 先	TEL 072-336-6900 FAX 072-336-6901 E-mail ega-s@matsubara.e-kokoro.ed.jp ホームページURL http://www.e-kokoro.ed.jp/matsubara/eganan/
校 長 名	山 本 清
研究主任名	谷 岡 光 子

3 . 管理機関

名 称	松原市教育委員会
住 所	〒580-8501 松原市阿保1丁目1番1号
連 絡 先	代表072-334-1550 (内線2573) 直通072-337-3132 F A X 072-332-7720 E-mail
担 当 者	松原市教育委員会 教育推進課 主幹 山 本 博